

文頭の And 再考

——コーパスを用いた文脈的機能と用法に関する研究——

徳永和博

Abstract

This paper provides a functional account of Sentence-Initial *And* (SIA) as it appears in academic discourse. In academic writing, there is a tendency to avoid beginning a sentence with *And*. In fact, many academic writing guides recommend the use of conjunctive adverbs (e.g. *moreover*) instead of SIA. However, Bell (2007) points out that the use of SIA is preferred rather than its adverbial counterparts in cases where SIA precedes interrogatives or certain kinds of sentence adverbs. This article proposes that an “And+Interjection” sequence could be considered as another case where the issue of interchangeability arises. Additionally, I suggest that this pattern be treated as a useful expression in that it can be applied to the introduction of concession phrases (e.g., *Admittedly...but...*) in academic writing. *

キーワード：学習英文法，文頭の And，間投詞，アカデミック・ライティング

1. はじめに

本稿では，書き言葉に見られる文頭の And（以下，Sentence-Initial *And*, SIA と略記）について検討する¹⁾。SIA は以下のように検定教科書（1），雑誌（2a），専門書（2a, b）に至るまで幅広いジャンルの書き言葉に見られる用法である（囲みは筆者による。以降，下線，太字，囲みはすべて筆者によるもの²⁾）。

- (1) a. Then, in the Meiji period, people began to use toothpaste, too. And today most people use toothpaste because it is convenient. (VISTA, 2013, p. 67)
- b. In summer, [...] it's beautiful when fireflies are dancing everywhere in a mazy flight. And it's delightful too to see just one or two fly through the darkness, glowing softly. [...] And oh how inexpressible, when the sun has sunk, to hear in the growing darkness the wind, and the song of autumn insects. (CROWN, 2015, p. 14)
- c. How did Ban become interested in helping people in need? And why did he begin building with paper tubes? (CROWN, 2018, p. 100)
- (2) a. And since Wimbledon, she's faced a particularly rough stretch in her personal life. (Time, 2018/08/27, p. 34)

- b. **And** if, indeed, such a “notation of structure” exists, as Jespersen held, then questions of truth and falsity arise for grammar as they do for any scientific theory.
(Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, p. 22)
- c. **And** with [iib] it may well be that I have in mind a single copy that is in one or other location – in this case the component propositions are mutually exclusive, just as they are in *Kim is in the study or in the rumpus-room*.
(Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, p. 1294)

本稿では学習英文法という観点から、高等学校のライティング指導で扱われるようなエッセイ・ライティングや、大学で指導されるようなアカデミック・ライティング（以下 AW と略記）に生かせるような SIA の特徴記述を行う。よって、本稿では AW の環境で使われる SIA を中心に考察する。

以下、2 節では学習者用英和辞典や大学受験用の参考書、そして AW の参考書における SIA の記述を概観し、英語学習者にとってどのような問題点が想定されるのかを確認する。3 節では AW の環境で生じる SIA についての先行研究に触れ、この環境で見られる SIA には Moreover などの追加を示す代替表現と入れ替えてしまうと不自然になる場合があることを見る。4 節では大規模コーパスを用いた調査方法について説明する。5 節では先行研究で指摘されたパターン以外にも代替表現との入れ替えが難しい場合として、「And + 間投詞的表現」の連鎖が該当することを述べ、その用法の文脈的機能について論じる。また、その連鎖に見られる不連続な共起傾向の中に譲歩表現として使用される例があり、他の譲歩表現 (*Admittedly...but...* など) への導入として使用できる英作文上有益な表現形式が見られることに言及する。6 節はまとめである。

2. 英和辞典・大学受験用および AW の参考書における SIA の記述

2.1 学習者用英和辞典の記述

まず、SIA が学習者用英和辞典でどのように説明されているかを見てみよう。

- (3) 従来 and で文を始めることは慎むべきとされてきたが³⁾、最近ではそのような規則は根拠がないとする意見もある⁴⁾。しかし and で文を始めているのは《書》で 5% 程度、《話》では若干《米》の方が多いいものの 10% 程度に過ぎない。[...] 《書》では接続詞を伴わずに個々の文をそのまま列挙する形式が力強く響き多用されるが⁵⁾、後に続く文との緊密な関係を示したい場合はセミコロン (;) を用いたり、《かたく》で追加を強意的に示す必要がある場合は moreover, additionally, in addition, further, furthermore など添えることが多い
(『ウィズダム英和辞典第 4 版』(s.v. and), p. 77)
- (4) Some of us still support the President; others think he should resign. (Ibid.)

(3) を見ると書き言葉では、SIA を使うよりもそのまま文を列挙したり、セミコロンや moreover

などの代替表現を使ったりすることが多いと説明されている。さらに (4) では SIA の代わりにセミコロンが使用されることが例示されている。次に、大学受験向けの英作文の参考書 (以下、英作文の参考書) や AW の参考書の記述を確認する。

2.2 英作文の参考書および AW の参考書の記述

まず、英作文の参考書で SIA がどのように扱われているのか見てみよう。小倉 (2016) は SIA について以下のように述べている (太字は小倉 (2016) による)。

- (5) [...] 一般に学術論文などでは等位接続詞 (but / and / or / do / for) の出だしを大文字で書くのは正式な書き方ではないことになっており忌避される。これらの出だしは前文に続けて小文字で書くのが原則である。どうしても文を切って新たに接続詞から始めたいのなら、But ではなく **However** を用いる。同様に And (大文字のときは「さらに」の意味) は Also / Besides / In addition などに, [...] すべきである。そして、いずれも直後にカンマを必要とする。ただし、会話 (口語体) の英訳なら But / And / So (文頭の大文字) を用いても構わない。 (小倉 2016: 23)

SIA の使用は学術論文では正式な書き方ではなく避けるべきもので、もし使用したい場合は Also などの代替表現を使用するように説明している。こうした立場は AW の参考書も同様である。

海寶 (2016: 17) によれば、AW の参考書では SIA の使用を推奨しない立場が一般的であるとされている。実際に日向 (2013) や和田 (2013) でも SIA の使用を避けるよう注意を促している。

- (6) アカデミック・ライティングでは、文頭に and, but などの等位接続詞を入れるなどというスタイルを取っているのが、第 1 文をピリオドで終えてから And mother does the books. という形で第 2 文を始める書き方は減点対象です⁶⁾。 (日向 2013: 103)
- (7) 学生の論文を添削していると、次の 2 つの禁則が意外と知られていないということがわかります。

① and / but / so / also で文を始めてはいけないということ

② [...]

上記の語の代わりに、文頭で用いるべき正しい接続詞は以下の通りです。

× And → ○ Moreover, / In addition (和田 2013: 160)

(6) (7) は「減点対象」や「禁則」という表現を使い、SIA の使用を避けるように促している。また、和田 (2013: 160) は SIA の AW における使用は明示的に間違いであるとし、Moreover や In addition で書き直すように述べている⁷⁾。

2.3 SIA の記述に関する問題点

上記の (3) や (5) から (7) の記述を見ると、書き言葉、特に AW では SIA の使用を避けたほうが無難であり、その代わりに代替表現を使用したほうが良いということが読み取れる。し

かし、こうした記述は2つの問題を孕んでいる。第一に、SIAは(1)(2)で確認したように、高等学校の検定教科書から専門書まで広いジャンルで見られる用法であり、決して口語的な場面に限定された用法とはいえないため、学習者がなぜAWでSIAを避けなければならないのか疑問を抱く可能性があるからである。また、より重要な問題点として、SIAの代替表現を乱用することにつながる危険性も考えられる。学習者にとって、辞書や参考書の記述はライティングをする際に大きく影響を及ぼすものである。そのため、SIAでなく代替表現を使用すべきという説明を読んで、「AWではSIAを使わずに、代替表現を用いれば良い」という極端な仮説を立ててしまい、本来SIAを使った方が自然な場合にも代替表現を使用してしまうという危険性がある。この問題点を念頭に置いて、どのような場合に代替表現を使用すると不自然になるのか3節で検討する。

3. AWで使われるSIAの先行研究

Bell (2007: 191) は科学や人文学、社会科学などの様々な分野の論文に使われているSIAを分析し、SIAの代わりに代替表現を用いると不自然になるパターンがあると(8)を挙げている。

- (8) a. 疑問文が後続する⁸⁾ (cf. (1c), 注(6i))
 b. 副詞が後続する
 i. *secondly, finally* などの列挙を示すタイプ
 ii. *critically* などの書き手の立場を示すタイプ
 iii. *similarly* などの類似した内容を導入するタイプ

(8a) の例として (9a), (8b) の例として (9b) に (8biii) の用例を挙げる。

- (9) a. Since both expert knowledge and user knowledge are necessary in order to make rational decisions in technology, and in medicine in particular, how can they be obtained? **And** who should make the decisions? (Bell 2007: 191)
 b. A critical factor here seems to be the magnitude and nature of the economic reform process, in particular whether a candidate country is sufficiently reformed to join an existing union. **And**, **similarly**, whether existing members are reformed to an extent such that an outsider would be interested in joining. (Ibid.)

(8) のような環境で *Moreover* などの代替表現が使いにくい理由について、Bell (2007: 191) は、代替表現は前に述べた主張の根拠を追加するために使われるもので、SIA のように重要度が同じものを列挙したり、列挙したものの最後であることを示したりする機能が弱いからであると説明している⁹⁾。

また、Bell (2007: 191-192) はSIAの前と後の文脈関係が *elaborative* または *resultative* (10a), *contrastive* (10b), *parenthetical* (10c, d) な関係にある場合についても、*Furthermore* や

Moreover などで代替させることは好ましくない (not comfortable) としている。

- (10) a. Not much is left to respect. There remains only an old man to abuse. **And** this is exactly what awaits him, precisely as he celebrates his son's successfully concluded training.
(Bell 2007: 190)
- b. La morale de cette histoire, as fables have it, is that like the Russian rulers who kept abolishing (the abolished) capital punishment from time to time, so at various times various authors, thinkers and jokers keep announcing the end of history. **And** this is certainly not the end of the story.
(Ibid.)
- c. They were not alone to dissent, and ever since discomfort and discord plagued the new historians' work and cogitations: Michelet criticized Ranke's theories, Guizot criticized Michelet, Thierry criticized Guizot and Mignet rejected all of the above. (**And** what kind of scientific discipline is that if each new generation of historians declares that the preceding one had it all wrong?)
(Ibid.)
- d. He still imagines that his suffering is unique and fails to identify, metaphorically, with the bull in the arena or the fish on the line. He wanders the streets. He talks to himself. He is like some medieval fool setting himself on itinerant display. (**And** Ellison indeed invokes "the Fool's Errand," as we have seen.)
(Ibid.)

And 自体は非常に単純な等位接続詞だが、(10) で例示されているように前後の文を複雑な意味関係で結びつける役割を持っている。このことから、SIA の使用には単に前後の文をつなげているというわけではなく、より複雑な文脈的要因が関わっていることが分かる。つまり、SIA はいつでも moreover などの代替表現で置き換え可能なものではなく、文脈によっては置き換えが困難な場合もあるのである。

Bell (2007) の指摘を考えると、AW を指導する際は (8) のような SIA が好まれる環境と、(10) で示されているような代替表現が好まれない環境に留意する必要がある¹⁰⁾。こうした Bell (2007) の観点は、AW の指導の際に SIA をどう説明すれば良いかについて有益な示唆を与えている。そこで、次節以降では Bell (2007) で挙げられている例以外にも SIA を代替表現で置き換えることが難しい場合があることを、大規模コーパスから抽出したデータを元に指摘する。

4. SIA と代替表現の調査

4.1 コーパス調査

まず AW での SIA がどのような語と共に用いられているかの全体像を把握するため、The Corpus of Contemporary American English (以下 COCA) のフルテキストデータから academic のジャンルに絞り、SIA に後続する 1 語を調査した¹¹⁾。また、代替表現である Additionally, Also, Further, Furthermore, Moreover, In addition についても同様の調査を行い、SIA の場合と比較した¹²⁾。この結果、SIA の場合のみ yes, oh, well などの間投詞的表現が後続すること

が分かった¹³⁾。

4.2 調査した間投詞的表現

4.1 節での調査結果を受けて、より網羅的に間投詞的表現との共起傾向を調べるため、(11) 感情的間投詞 (emotional interjection) と (12) 「命令間投詞 (imperative interjection)」, (13) 間投詞的表現について追加調査を行った。

- (11) a. 驚き : o, oh, ah, ha, aha, etc.
 b. 喜び : hurra, huzza, etc.
 c. 称賛 : bravo, etc.
 d. 悲しみ : ah, alas, heigh-ho, etc.
 e. 嫌悪・苦痛 : pah, ugh, pshaw, tut, fie, ect. (荒木・安井 1992: 460)
- (12) lo (and behold), hush, etc. (Ibid.: 681)
- (13) look, okay, say, well, yes など (松尾他 2015: 214-269)

本稿では、(11) から (13) をまとめて「間投詞的表現」とし、次節以降 SIA と間投詞的表現の連鎖に注目して、その機能と表現を考察する。

5. SIA と間投詞的表現

5.1 SIA + 間投詞的表現の分布

SIA に後続する間投詞的表現がどのような分布で見られたかの調査結果は (14) である¹⁴⁾。なお、(14) に記載されている数値は非該当例を排除したものである¹⁵⁾。特に共起傾向が著しかった間投詞的表現は yes で 31 件 (oh, yes も合わせると 33 件) であった。

- (14) SIA と共起した間投詞的表現¹⁶⁾ (計 48 件)
 alas (1), hello (1), lo (2), look (2), lo and behold (2), oh (4), oh yes (2), well (3), yes (31)

(14) のそれぞれの間投詞的表現の例を 1 例ずつ (15) から (23) に示す。

- (15) Four huge countries stand, the one opposing the other: China, Soviet Russia, America and Japan. Here in the Pacific the great game, the future war, will be played. **And** alas for the vanquished and perhaps for the victors¹⁷⁾ (JC 52). As we meditate on this passage, we realize how accurate his understanding of history, politics, economics, and sociology was as he looked into the future. (COCA: academic)
- (16) So, sorry, Louis. You lost your head to the power of family environments upon head children. **And** hello, Dolly¹⁸⁾. May we forever restrict your mode of manufacture, at least for humans. (COCA: academic)

- (17) And Jesus, when he was baptized, went up straightway out of the water: and, lo, the heavens were opened unto him, and he saw the Spirit of God descending like a dove, and lighting upon him: **And** lo a voice from heaven, saying, This is my beloved Son, in whom I am well pleased. (COCA: academic)
- (18) Another has the name of that small songbird known as the blue tit. **And** look, this one is for an animal so exotic that it's usually known by its Latin name: *Odontodactylus cultrifer*. (COCA: academic)
- (19) The Schlieffen plan always maintained that it was probable that the French would stop the Germans east of Paris, at which time it would be necessary to envelop Paris to the west, and this would require 24 divisions that the Germans did not have. **And**, lo and behold, this is exactly what happened in 1914. According to Holmes, Moltke could disregard the most important part of the Schlieffen plan' and still be executing the Schlieffen plan'. (COCA: academic)
- (20) The manuscript came back with a three-page comment that boiled down to: too many stories, not enough focus. **And**, oh, by the way, I'm really interested in that father. My initial reaction was, "Well, I'm not!" An attitude. It lasted overnight. (COCA: academic)
- (21) Due to long harsh winters, many buildings offer interior parks and fountains, even waterfalls and sculpture gardens. **And**, oh yes, buildings are connected block after block with enclosed overhead walkways so pedestrians can navigate downtown without facing winter's cold and ice. (COCA: academic)
- (22) We have to listen to the story from the regions. **And**, well, that's what we did in 2002, when Contravia began. (COCA: academic)
- (23) Biological diversity is more imperiled than ever before. **And** yes, there are more scientists engaged in all these things, but we still are a long way away from being as engaged as we should be. (COCA: academic)

(15) から (23) のデータを見ると、SIA と間投詞的表現の連鎖の特徴として (i) 間投詞的表現と共起するのは And のみで、その代替表現には間投詞的表現を伴う連鎖が見られない点、(ii) SIA と共起する間投詞的表現の中では、yes との共起が最も多い点が観察された。そこで、最も頻度の多かった And yes の連鎖について注目し、文脈内の働きを次節で確認する。

5.2 And yes の機能：“Amplifying evidence”

ここでは、SIA+yes の連鎖について、どのような文脈的機能が見られるのか考察する。(24) の And yes は単に「And 以降の文も真である」ということを述べているだけでない。

- (24) If you want the magic combination of scholarly respectability and actual cash for your work, you'll often find it at a prestigious trade house. **And** yes, many tenure committees are just fine with this, as are the committees making decisions about the promotion to full professor. (COCA: academic)

And yes の前文を見ると、学者としての社会的地位と研究費を両立させることが、a prestigious trade house（大衆向きの書物を扱う有名出版社）で実現するかもしれない、ということが述べられている。And yes 以降では、実際に両立させている人たちが具体例として提示されている。つまり、And yes の前文で述べられた内容を支持する例が And yes の後に現れるような形で談話を形成している。こうした談話の特徴は、Udo(1993: 5-6)の主張する SIA の機能の一つ “Amplifying evidence” と類似していると思われる。その定義を (25) に、例文を (26) に挙げる。

(25) **Amplifying evidence**

A sentence with this type of ‘And’ helps to put stress upon the point presently being discussed, by presenting some extreme case in which the situation is exemplified, whereas with the other use previously presented, emphasis is expressed by giving some persuasive evidence or ground for support. (Udo 1993: 6)

- (26) “Local GPs are enthusiastic about Thomson’s work, especially now that they need to shop around within the NHS for the best value for money. The same operations might cost considerably more if carried out by orthopaedic surgeons and take up beds. **And** if some orthopaedic surgeons have been less than welcoming, others now refer patients to Thomson. (Ibid.: 6-7)

Udo (1993: 7) は、(26) の SIA について、Thompson が優れた整形外科医であるという主張を支持する証拠を文脈に導入するために使われていると分析している。こうした特徴を (23) の文脈的機能として一般化している。(24) の And yes も成功者の例を後の文脈に導くことによって、“you’ll often find it at a prestigious trade house” の主張を強めていると考えられる。

5.3 And yes と呼応する英語表現上有益な表現

And yes の特徴は 5.2 節で触れたような文脈的機能だけではない。コーパスから抽出した And yes の例を観察すると、5.2 節で述べた文脈的機能の他に、ある特定の語と不連続な共起傾向を持つことが観察された。

- (27) a. You are going to get some ownership in this company. **And** yes, you are going to maybe run a little tighter sometimes than you might have when you were working entirely for salary. **But** you are going to be driven to build a bigger, more exciting, and more interesting company. (COCA: academic)
- b. At first sight, it seems that the ndichie (important Onitsha elders) sadly agreed with the logic of their mission hosts: Yes, their “goats and sheep breed two, some three, but they never destroyed them.” **And**, yes, their abhorrence of the twin-born must be superstitious if their oyibo (European/missionized) colleagues told them so. This, **however**, would be a misreading of a common Igbo elder’s rhetorical strategy and of the politeness required by any Igbo person in the compound of another. (COCA: academic)

- c. For sure, this is likely to mean she will end up with beliefs that are widely shared with others who have taken the same path: beliefs, that is, in what science reveals as the truth about the world. **And yes**, if you want to put it this way, you could say this means that by her own efforts at understanding she will have become a scientific conformist:[...]. **But**, I will say I would be only too pleased if a big brother or sister or schoolteacher should help her get to that enlightened state. (COCA: academic)

(27) では、And yes で「確かに～」という内容が示され、譲歩的な内容が続いている。そして、But や However 以降で書き手が本当に伝えたい内容が示されている¹⁹⁾。このように、And yes には逆接表現との不連続な共起傾向が見られる。

この形式は、英語表現上重要である。それは、True, ..., but... や Sure, ..., but ..., Of course, ..., but...²⁰⁾, Admittedly, ..., but ... などの譲歩表現と共通した談話形式を持つからである²¹⁾。

- (28) **True**, some Muslims have become heads of national and international environmental organizations, **but** the average citizen is only vaguely aware of the extent of the crisis; [...]
(COCA: academic)
- (29) **Sure**, some don't pay well, **but** others do, and companies launching or updating their sites often hire Web-savvy writers to provide copy. (COCA: academic)
- (30) **Of course**, Americans and Europeans are interested in genealogy, **but** much of this is a hobby. (COCA: academic)
- (31) **Admittedly**, public opinion can be capricious, **but**, in this case, we take it to be a reliable indicator of developments to come. (COCA: academic)

これは学習者の英語表現の幅を広げる機会につながる重要な SIA の特徴である。例えば、英語を苦手とする学習者に (28) から (31) の表現をいきなり導入するのは難しいかもしれないが、よりなじみのある And と yes を使った表現から始め、徐々に (28) から (31) のような発展的な譲歩表現を導入することで、英語に対する抵抗感を幾分か減らせられると思われる。

SIA を単体で見れば、AW で避けるべき対象かもしれないが、代替表現を使用すると不自然になる場合や、SIA が持つ文脈的機能、(28) から (31) で示したような効果的な英語表現と共通した談話形式を考えると、単純に代替表現を使えば良いという指導は再考の余地があると思われる。

6. まとめ

本稿では、AW で SIA の使用を避けるように促す記述には改善すべき点があることを確認した。特に、SIA の代替表現を使うと不適切になる場合に留意することや、SIA の効果的な用法を知ることがより適切な指導につながることを主張した。また、5.3 節で述べたように、SIA には様々な譲歩表現をライティングの授業で導入する際に、その前段階として利用できる表現形式があ

ることにも言及した。SIAを単に避けるべきものとして結論づけてしまうのではなく、事実観察を通して、様々な観点からSIAの持つ特徴を考え続けることが、学習者にとってより適切な指導に結びつき、ひいては学習英文法の発展につながると信じている。

注

* 本稿は2019年3月25日、立命館大学で開催された国際言語文化研究所主催シンポジウム「学習英文法を巡って」において、口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。口頭発表から本稿執筆に至るまで労を惜しまずご助言頂いた滝沢直宏先生に感謝申し上げます。また、草稿段階では岡田禎之先生から内容を深めるうえで貴重なご指摘を賜った。西脇幸太氏、福谷美保子氏、松田佑治氏（五十音順）からは高等学校で教壇に立たれた経験を踏まえた有益なコメントを頂いた。加えて、口頭発表時にフロアから質問してくださった方々、とりわけ佐野まさき先生、David Coulson先生、藤田郁氏からは示唆に富むコメントを頂いた。なお、本論の不備・誤りはすべて筆者の責任である。

1) 本稿では文頭のAndの後にカンマがつく場合もつかない場合も特に区別せず「文頭のAnd」とする。コーパス検索ではどちらの場合も検索している。また、And so（さて、ところで）やAnd then（それから）などの表現は本稿では検討していない。

2) 「検定教科書」とはここでは、文部科学省による検定に合格し、実際に高等学校等で使用されている教科書を指す。

3) 池田（1992: 390）およびNesfield（1903: 202）を参照。

4) Biber et al.（1999）、Longknife and Sullivan（2002）、松尾他（2015）を参照。

5) 実際の『ウィズダム英和辞典』の表記では「接続詞」の部分が囲み文字になっているが、ここでは「接続詞」として省略せず表記している。

6) 「減点対象」ということだが、実際には論文や専門書などでもSIAは使用されている。

- (i) Such facts pose a serious problem that was not recognized in earlier work: How does every child know, unerringly, to interpret the clause differently in the two cases? **And why does no pedagogic grammar have to draw the learner's attention to such facts (which were, in fact, noticed only quite recently, in the course of the study of explicit rule systems in generative grammar)?**

(Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, p. 8)

7) 西脇幸太氏、福谷美保子氏、松田佑治氏との個人談話によれば、高等学校のライティング指導では基本的に文頭でAndやButの使用を避けるよう指導がなされるようである。さらに西脇氏からは「学習者としてはまずは安全な方を覚えておく方がよい、(略)多少の不自然さが生じる文脈はあるかもしれないが、最も安全なものを発信では使う方がよいのではないか」とのコメントを頂いている。本稿は決してその立場を否定するものではないし、SIAの使用を学習者に積極的に勧める立場でもない。しかしながら、SIAとの置き換えが難しい場合についての知識を得たうえで指導を行う方が、生徒からなぜSIAが実際の英語で使われているかを問われたときに、より適切な対応ができるのではないかと思われる。

8) 口頭発表時、佐野まさき先生からSIAに後続する疑問文にはwh疑問文が多いのではないかとのご指摘があった。具体的に数を数えたわけではないが、読書を通じて得たSIA+疑問文の連鎖では、wh疑問文の例が多い印象を受ける。この点は今後注目していきたい。

9) このSIAの機能は、語句・節を並列するときのandが元々有しているものであって、andが持つ基本的な機能と考えられる。

10) 田中（1997: 156）は英語で論文を書く際に「文頭での“and”の使用は不用意になされるべきではない、ということを確認した上で、なおかつ、ある効果を得るために、意図的に用いられるのであれば、

それは否定されるべきものではなく、認められるべきものだ」と主張している。

- 11) SIA に後続する 1 語の調査方法は以下である。なお、本稿では検索対象とするデータ (入力ファイル) を in_file と表示する。perl -ne 'while (/^And \(\) ?\S+\b/g) {print "\$&n";}' in_file
- 12) 代替表現の調査方法は注 11 の検索式内にある And をそれぞれの表現に変えたもの。
- 13) (1b) にも間投詞が使われている。
- 14) 調査方法は perl -ne 'while (/^And \(\) ?(p(shaw|ah)|h(eigh-go|urra|uzza)|bravo|y(eah|es)|h(ello|ey|uh)|o(kay|h)|a(las|ha|h)|look|well|ugh|tut|say|fie|ha|lo) \(\) ?\b/g) {print "\$&n";}' in_file | sort | uniq -c | sort -rn
- 15) 例えば, (i) のように look が動詞として使われている例は排除している。また, academic のジャンルに分類されていても, 元データを見ると会話であると確認できたものは削除している。
 - (i) And look at the bastards now!
- 16) 口頭発表時, 藤田郁氏より of course の例も検討した方が良いのではないかとコメントを頂いた。of course は松尾他 (2015) では「間投詞的表現」ではなく「前置詞句表現」に分類されており, 本稿での調査もその分類を参考としているため, SIA と of course の連鎖は調査していなかった。COCA のフルテキストファイルを対象に調査を行ったところ “And, of course,” は 3161 件, “And of course,” は 1489 件, “And of course” は 1128 件, “And, of course” は 77 件であった。検索方法は perl -ne 'while (/^And \(\) ?of course \(\) ?\b/g) {print "\$&n";}' in_file である。
- 17) JC はこの論文で引用されている Kazantzakis の書いた *Japan China* という書籍名の略記と思われる。引用符はセリフではなく, passage とあることから本の引用を表すと思われるので採用した。
- 18) <http://ur2.link/ASVk> で確認したが会話ではなかったので採用した (2019 年 4 月 30 日アクセス)。
- 19) (27b) では Yes → And, yes という流れに, (27c) では For sure → And yes という談話の流れになっていることも英語表現上興味深い。
- 20) 藤田郁氏のご指摘により追記。
- 21) 検索方法は例えば Sure...but であれば perl -ne 'if (/^Sure\, .+? but\b/g) {print "\$&n";}' in_file である。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔 (編). (1992) 『現代英文法辞典』東京:三省堂.
- Bell, D. (2007) “Sentence-Initial *And* and *But* in Academic Writing.” *Pragmatics* 17 (2), 183-201.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- 日向清人. (2013) 『即戦力がつく英文ライティング』東京: DHC.
- 池田拓朗. (1992) 『英語文体論』東京: 研究社.
- 井上永幸・赤野一郎 (編). (2019) 『ウィズダム英和辞典 第4版』東京: 三省堂.
- 海竇康臣. (2016) 「書き言葉における文頭の And」『立命館言語文化研究』27, 17-26.
- Longknife, A. and Sullivan, K. D. (2002) *The Art of Styling Sentences* (4th ed.). NY: Barron's Educational Series, Inc.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美 (編). (2015) 『英語談話標識用法辞典—43 の基本ディスコース・マーカー』東京: 研究社.
- Nesfield, J. C. (1903) *Errors in English Composition*. London: Macmillan.
- 小倉弘. (2016) 『京大入試に学ぶ和文英訳の技術』東京: プレイス.
- 田中祐治. (1997) 「英語教育関係の論文における英語表現—文頭の And (2) —」『中国地区英語教育学会研究紀要』27, 155-160.
- Udo, M. (1993) “A Note on the Pragmatic Force of Sentence-Initial ‘And’: Its Contribution to the

Communication Process.” *Studies in Linguistic Expression* 9, 1-9.

和田朋子. (2013) 『増補改訂版 はじめての英語論文 引ける・使えるパターン表現&文例集』 東京：すばる舎.

例文出典

教科書

金子朝子他. (2013) *VISTA English Communication I*. 東京：三省堂.

霧崎實他. (2015) *CROWN English Communication III*. 東京：三省堂.

霧崎實他. (2018) *CROWN English Communication III (New Edition)*. 東京：三省堂.

書籍

Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. NY: Praeger.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sean, G. (2018, August 27) “Serena, in progress.” *Time* 192 (8).